

平成 30 年 6 月 20 日現在

機関番号：21301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K20706

研究課題名(和文) 化学療法中の乳がんサバイバーにおける就労との両立に向けた看護支援プログラムの検討

研究課題名(英文) Development of nursing support programs to assist breast cancer survivors to continue employment during chemotherapy

研究代表者

鈴木 敦子 (ASUKO, SUZUKI)

宮城大学・看護学群(部)・助教

研究者番号：60527901

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、化学療法中に就労を継続している乳がん患者のセルフケア能力を明らかにすることを目的に、インタビュー調査を行った。その結果、【化学療法中の就労継続に主体的に取り組む力】【知識や体験に基づいて化学療法中の就労継続が生活に及ぼす影響を予測する力】【化学療法中の副作用症状や心身の不調を管理する力】【家族内役割と生活の営みを家族と共に再調整する力】【職場から理解と協力を得る力】【副作用症状や体調に応じて仕事を管理する力】【職場復帰へ向けて準備する力】が明らかとなった。看護支援プログラムとして、セルフケア能力を適切に評価し個別的な支援を提供していく必要性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：This study conducted interviews with patients with breast cancer who continue employment during chemotherapy to clarify their self-care abilities. The results show that these employed patients display the following characteristics, they: "are self-motivated in being committed to employment during chemotherapy", "estimate the effects of employment during chemotherapy on life based on knowledge and experience", "manage adverse-drug-reactions and the state of the mental and physical illness during chemotherapy", "adjust family roles and activities in cooperation with other family members", "are shown understanding and cooperation at the workplace", "manage work in accordance with adverse-drug-reactions and health conditions", and "make active preparations for returning to work". The findings suggest the necessity to develop nursing support programs that enable providing support suitable to individuals by assessing their self-care abilities based on the progress of the treatment.

研究分野：がん看護学

キーワード：乳がん 化学療法 セルフケア 就労

## 1. 研究開始当初の背景

本邦での乳がん罹患者は年間約6万人を超え<sup>1)</sup>、乳がん医療は我国のがん対策における重要な課題の1つとなっている。がん患者の就労に対する意欲は高い一方で<sup>2)</sup>、男女を総合し「乳房の悪性新生物」による労働損失が最も大きいことが報告され<sup>3)</sup>、がんサバイバーの就労問題は重要課題の1つとなっている。また、化学療法中の就労は支持療法の発展に伴い、セルフケアを促進することで就労継続が可能となることが考えられ、高額な療養費負担、若年性乳がん患者の増加により、乳がん患者の就労のニーズは今後も高まると考えられる。

がん患者の就労に関する先行研究では、職場復帰の阻害因子に関する研究や<sup>4)5)</sup>、復職に関する体験<sup>6)7)</sup>について報告されており、復職に向けた調整や心身の負担があることが示されている。さらに、化学療法中の患者においては、有害事象の予防や対処を含む治療期間中のセルフケア支援の重要性が示されており、化学療法中の就労乳がん患者への看護師の役割は大変重要であると考えられる。

研究開始当初の文献検討より、就労支援を提供する看護師の知識不足、支援ツールの少なさが指摘されており<sup>8)</sup>、看護師が就労支援のニーズを早期に見出し介入するためのアセスメントツールの開発や、就労という社会的背景を踏まえたセルフケア支援を確立することの重要性が示された。セルフケア支援においては、セルフケア能力に着眼し支援を検討していくことが不可欠であるが、がん患者のセルフケア能力に関する文献は散見されたものの、乳がんといった疾患特異性や就労者という対象特性を踏まえたセルフケア能力に関する報告はなく、十分な検討がなされていない現状があると考えられた。

以上のことから、就労継続を希望する化学療法中の乳がんサバイバーに対する支援においては、セルフケア能力を明らかにし、看護支援を検討することが重要であると考えた。

## 2. 研究の目的

本研究では、化学療法中の乳がんサバイバーにおける就労との両立に向けた看護支援プログラムの検討に対する示唆を得るため、化学療法中の就労乳がん患者のセルフケア能力について明らかにすることを目的とした。

## 3. 研究の方法

### (1) 研究デザイン

質的記述的研究

### (2) 用語の定義

本研究で就労とは、「職業の種類を問わず事業または事務所に雇用されている者、自営業者、個人事業主」とした。

本研究でセルフケア能力とは、「化学療法中の乳がん患者が治療と就労の継続という生活経験において、セルフケアの学習や実践

を通して獲得する、セルフケアの実施を可能とする自らの意思を含んだ複合的で後天的な能力」とした。

### (3) 研究対象者

成人期にある20歳以上65歳未満で病名を告知され、化学療法実施後6か月以内の病状が安定している乳がん患者のうち、治療中も就労を継続していた者を対象とした。対象者の除外基準は、ステージと診断された者、認知機能障害がある者、依頼当日に体調が不良な者とした。

### (4) データ収集方法

研究対象者の属性は診療録から収集し、対象者の就労状況は面接調査時に聴取を行った。また、研究者が作成したインタビューガイドに基づいて面接調査を行った。会話は、対象者の同意を得てICレコーダーに録音し、面接時の表情や反応についてフィールドノートに記載を行った。面接内容やフィールドノートに記載した内容は逐語録を作成しデータとした。

### (5) 調査内容

研究対象者の属性として、現病歴、病期、化学療法のレジメン、同居家族の有無を収集した。就労状況として、職種、雇用形態、病気休暇や休職制度の取得状況を収集した。

面接内容は、治療と就労の両立の経験、認識、思い、工夫や対処および行動とし、セルフケアに至った一連の経験を尋ねた。

### (6) 分析方法

録音内容とフィールドノートに記載された内容から逐語録を作成し、質的帰納的に分析を行った。逐語録を繰り返し熟読し、両立の工夫や対処、行動、両立の生活の思い、経験が語られている文章や言葉を抽出した。文脈上の意味を損ねないように留意し、一つの意味内容を表す文章のまとまりに区切りコード化し、コードの意味内容を読み取り、コード化した内容の共通性と相違性を比較し、類似したコードを集め、類似したコードに共通する意味内容を推論しサブカテゴリーとした。類似するサブカテゴリーを集め、抽象度を上げてカテゴリー化し、さらに、類似するカテゴリーを集め、抽象度を上げてコアカテゴリーとし命名を行った。また、真実性の確保のため、分析の過程で質的研究者やがん看護の専門家にスーパーバイズを受け、研究者間でデータの解釈が一致するまで吟味を行った。

### (7) 倫理的配慮

本研究は、宮城大学研究倫理専門委員会、研究協力施設の倫理委員会の承認を得て行った。

## 4. 研究成果

### (1) 化学療法中の就労乳がん患者のセルフケア能力

#### 対象者の概要

研究協力が得られた12名を対象とした。平均年齢は47.5±7.66歳であり、術前化学

療法、術後化学療法を行っていた者は、共に6名であった。病期は、ステージが4名、ステージが5名、ステージが1名、温存乳房内再発が1名であった。化学療法中に就労を継続していた者は7名、治療開始時から休職をしていた者は4名、化学療法中の途中で休職に至った者は1名であった。正規雇用は4名、非正規雇用は6名、自営業は3名であった。

## 結果

分析の結果、575コード、103サブカテゴリー、24カテゴリーが生成された。コアカテゴリーとして、【化学療法中の就労継続に主体的に取り組む力】【知識や体験に基づいて化学療法中の就労継続が生活に及ぼす影響を予測する力】【化学療法中の副作用症状や心身の不調を管理していく力】【家族内役割と生活の営みを家族と共に再調整する力】【職場から理解と協力を得る力】【副作用症状や体調に応じて仕事を管理する力】【職場復帰に向けて準備する力】の7つのコアカテゴリーが明らかとなった。以下に、コアカテゴリーは【】カテゴリーは、サブカテゴリーは『』、データの例示部分は「」で示す。

【化学療法中の就労継続に主体的に取り組む力】は、働き続ける意思を持ち、病気と折り合いをつけながら化学療法中の働き方を自己決定していく能力である。これは、働き続ける意欲や目標を持ち治療に取り組む力 病気と折り合いをつけながら働き方を自己決定する力 治療と就労に関する選択や行動を肯定する力 の3つのカテゴリーで構成された。最も多くのコード数から導出された 病気と折り合いをつけながら働き方を自己決定する力 は、「体に負担をかけないように。今までは何も考えないで、平気で使って疲れても、疲れたっていう感じていたんだけど、そこの折り合いは・・・。」の語りから導かれた『身体の負担をかけないで働くことを考える』などの7つのサブカテゴリーが含まれた。

【知識や体験に基づいて化学療法中の就労継続が生活に及ぼす影響を予測する力】は、治療や副作用症状を理解し、治療中の体験から自己に起こりやすい症状を捉え、治療経過や体調の変化の見通しを立てていく能力である。これは、治療や就労に関する情報を探索する力、化学療法に伴う副作用症状を把握する力、工作中的体調の変化を把握する力、治療と就労の継続が日常生活に及ぼす影響を考える力、自分に起こりやすい副作用症状の傾向と経過を予測する力、乳がん治療の長期的な見通しを立てる力 で構成された。最も多くのコード数から導かれた 化学療法に伴う副作用症状を把握する力 は、「最初と薬が変わったことによって出方がちょっと違うので、辛さが違う。」の語りから導かれた『薬剤に応じた副作用の違いを捉える』、「本当に平気だったの

は最初だけで、2回目位から最初の1週間はあるんじゃないかって。」の語りから導かれた『サイクルに応じた副作用の違いを捉える』などの3つのサブカテゴリーが含まれた。

【化学療法中の副作用症状や心身の不調を管理していく力】は、化学療法中の副作用症状への対処や不安や気がかり等への対処など、治療中の心身の負担が増加しないように体調を管理する能力である。これは、治療と就労を継続するために副作用症状に対処する力 心身の負担とならないように体調管理を行う 乳がん化学療法中の不安やストレスに対処する力 の4つのカテゴリーで構成された。最も多くのコード数から導かれた 乳がん化学療法中の不安やストレスに対処する力 は、「ちょっと楽に考えていかなきゃ、乗り越えられないかなっていうところがある。」の語りから導かれた『ストレスや気分の落ち込みに対処する』などの5つのサブカテゴリーが含まれた。

【家族内役割と生活の営みを家族と共に再調整する力】は、家族と共に育児や家事などの家族内役割を調整し、生活を再調整する能力である。これは、治療と就労の継続のために家族の理解と協力を得る力 副作用症状に備えながら家族内役割を担う力 の2つのカテゴリーから構成された。最も多くのコード数から導かれた 治療と就労の継続のために家族の理解と協力を得る力 は、「家事を分担することが、そこが一番、私は気分的にも体的にもすごく楽になりました」の語りから導かれた『家族で家事を分担する』などの6つのサブカテゴリーが含まれた。

【職場から理解と協力を得る力】は、職場との良好な対人関係を維持しながら、自己の病気や治療の説明や治療中の働き方について交渉や依頼を行い、職場の理解と協力を得ていく能力である。これは、治療中の働き方を交渉していく力 仕事を続けるために職場の理解を得る力 自己と職場の好ましい対人関係を保つ力 心身の負担を軽減するために職場から協力を得る力 の4つのカテゴリーから構成された。最も多くのコード数から導かれた 仕事を続けるために職場の理解を得る力 は、「職場の方にも初めの分かった時点で、すぐ朝礼かなんかで、「これから私はこういう診断を受けたので、こういう治療が始まるので、よろしくお願ひします」みたいな感じで言いました。」の語りから導かれた『職場の同僚へ病気や治療の事実を伝える』などの10のサブカテゴリーが含まれた。

【副作用症状や体調に応じて仕事を管理する力】は、治療と就労を継続していくために、体調変化の予測や体調に応じて、自己の責任の範囲内での仕事内容の調整、雇用条件や就業規則に則り仕事内容や勤務時間を調整していく能力である。これは、副作用を想定し治療と就労のスケジュールを管理し

ていく力 体調に応じて業務量を調整する力 雇用条件や就業規則に応じた制度や資源を活用する力 の4つのカテゴリーから構成された。最も多くのコード数から導かれた 雇用条件や就業規則に応じた制度や資源を活用する力 は、「前と同じように働くってなったらできないけれども、ちょっと短めにしたりとか、週例えば5日入るのを、週3日、4日にしてみるとか。」の語りから導かれた『雇用条件や就業規則に応じて勤務時間や勤務日数を調整する』などの8つのサブカテゴリーが含まれた。

【職場復帰へ向けて準備する力】は、職場復帰時の困難やその対処を考えながら体力回復に取り組み、職場復帰が可能となるように体調を整えていく能力である。定期的に職場と連絡を取る 職場復帰に向けて気力と体力の回復に取り組む力 職場復帰時の状況を想定する力 の3つのカテゴリーから構成された。最も多くのコード数から導かれた 職場復帰時の状況を想定する力 は、「本当に重い物だと、お醤油とか、だしつゆみたいものが入っているものを、段ボールで12パックをごとって持ったり。それを上にガシャってやらないといけないんですけども、多分、腕上げるのもあれだし重いしで、うーん、難しそうだなって。」の語りから導かれた『治療完遂後の後遺症から仕事上の困難を考える』などの5つのサブカテゴリーが含まれた。

(2) 化学療法中の乳がんサバイバーにおける就労との両立に向けた看護支援プログラムの検討

研究成果(1)を踏まえ、プログラムの検討に当たっては、以下の支援内容について考慮する必要性が示唆された。

治療と就労継続に対する主体的な取り組みに関する援助

働き続ける意思を持ち、病気と折り合いをつけながら化学療法中の働き方を自己決定する能力を高めるためには、就労を継続することの価値観や目的、自己実現への思いを伺い、患者と共に共有しながら治療と就労の両立を支えていくことが重要な支援であると考えられる。セルフケアは知識の学習と活用を必要とするばかりでなく、動機付けと技能を維持することも必要とすることからも、治療の経過に応じて患者の思いを傾聴し、患者自らが自己の選択や行動を肯定していけるように援助することが必要である。

知識の獲得を促し就労継続による生活の影響を予測することへの援助

化学療法中の就労継続による生活の影響を予測する力は、副作用症状に対するセルフケアや体調管理、仕事を含む日常生活の調整を行っていく上で重要な能力であると考えられる。この能力を高めるためには、病状や治療を正しく認識し、化学療法に伴う就労を

踏まえた日常生活への影響を捉えられるように、疾患や治療に関する知識や情報の提供と共に、就業規則や活用できる社会資源に関する知識の獲得を促し、生活への影響を共に考えることが必要である。また、副作用症状の出現やセルフケアの体験を基に、自分に起こりやすい副作用症状や体調の変化を把握し、症状の変化の予測や乳がん治療の長期的な見通しを随時修正することも必要であると考えられる。

副作用症状に対するセルフケアと体調管理への援助

治療と就労を継続するためには、セルフモニタリング、副作用への予防や対処、脱毛や爪の変化に対する外見を整えるといったセルフケアや、病気や治療に対する不安や就労と両立することへのストレスに対処することが不可欠である。これらの一連のセルフケアは、知識や体験に基づいて化学療法中の就労継続が生活に及ぼす影響を予測する力と関連していると考えられ、患者の治療や症状に関する知識や体験からセルフケアに繋げ、継続して行えるように支援していく必要がある。

家族内役割調整に関する援助

乳がんの罹患は成人期に多く、仕事における社会的役割以外にも、妻、母親、嫁として、子育てや介護といった様々な役割を担っている。家族内役割と生活の営みを家族と共に再調整する力を高めるためには、家族背景、本人および家族成員が担う役割や、治療と就労の継続に対する家族の考え等をアセスメントし、家族への影響を患者と共に考えながら生活の再調整を支援していく必要がある。

職場から理解や協力を得るための説明や依頼に関する援助

体調に応じた柔軟な働き方や就労環境の調整を行うためには、周囲の人々からの理解や協力が得られるように説明し、対話していくことが不可欠である。そのため、就労に及ぼす影響や就労上困難となる事項と調整事項や依頼事項を明確にし、誰に、どのように説明や依頼を行うのかを患者と共に確認し検討していく支援が必要である。

副作用症状や体調に応じて仕事を管理することへの援助

副作用症状や体調に応じて仕事を管理する力を高めるため、患者の職種や職責、仕事内容と、治療計画の見通しや副作用症状の予測を踏まえ、心身の負担を軽減するためのスケジュール管理や業務の調整を行えるように支援する。また、心身の負担を軽減するために調整が可能な業務、就業規則などに応じて休暇を取得するなど、活用可能な社会資源を確認し生活調整を行えるように支援することが必要となる。

職場復帰に対する支援

休職に至る過程では、化学療法開始時から休職の決断を行う場合や、副作用症状の出現により、治療の途中で休職に至る場合もある。

このことから、休職に至った経緯を確認し、職場復帰時に困難となる事項や気がかりを明確にし、体調の回復を支援しながら職場復帰の準備を進めていくことが必要である。

#### 結語

乳がん化学療法中の治療と仕事の両立にあたっては、病気や治療に対する正しい理解や認識、病気への受容を基盤とし、有害事象の予防や対処といった化学療法に対する基本的なセルフケア行動を遂行しながら、就労環境の調整や役割調整を行うことで、治療と就労の両立が可能となるのではないかと推察される。そのため、今回の研究で明らかになったセルフケア能力と支援内容を考慮したプログラムを検討することが必要である。

また、セルフケア能力は、治療の時期に応じて獲得される時期や必要となる能力も異なることが考えられ、治療の経過に応じてセルフケア能力を評価し個別的な支援を検討することも必要であると考えられる。

今後の課題としては、支援プログラムの策定と有効性の検証を行うと共に、化学療法中の就労乳がん患者のセルフケア能力を評価できる尺度開発や、就労支援のニーズを判断できるアセスメントツールの開発が課題であると考えられる。

#### <引用文献>

- 1) 独立行政法人国立がん研究センターがん対策情報センター がん情報サービス：  
<http://ganjoho.jp/public/statistics/public/statistics01.html>. 検索日 2014/9/6
- 2) 桜井なおみ：がん患者の就労の現状と就労継続支援に関する提言．日本医事新報，442，p89 - 93，2009．
- 3) 福田敬：厚生労働科学研究費補助金(がん臨床研究事業)分担研究報告 がんの罹患による労働損失の推計．  
[http://survivorship.info/pdf/report2012/research\\_activities\\_19\\_03.pdf](http://survivorship.info/pdf/report2012/research_activities_19_03.pdf)．検索日 2014/9/6
- 4) 中谷直樹、中谷久美：がん患者のサバイバーシップ社会的問題．腫瘍内科，5(2)，p122-130，2010．
- 5) Mehnert A: Employment and work-related issues in cancer survivors. Critical Reviews in Oncology/Hematology, 77(2), p109-130, 2011.
- 6) 堀井直子：外来化学療法を受けているがん患者の復職に関する体験．日本職業・災害医学会誌，57(3)，p118-124，2009．
- 7) 山脇京子他：壮年期胃がん手術体験者の職場復帰に伴うストレス．高知大学学術研究報告，53，p47-63，2004．
- 8) 川本利恵子：がん患者・経験者の就労支援のあり方に関する検討会．日本看護協会，  
<http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10901000-Kenkoukyoku-Soumuka/000043939.pdf>．検索日 2015/6/20

#### 5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

研究成果は、今後関連学会で発表を行う予定である。

#### 6．研究組織

##### (1) 研究代表者

鈴木 敦子 (SUZUKI, Atsuko)

宮城大学・看護学群・助教

研究者番号：60527901